

んはどうぞだ、と
ましても。
あ——大変
い湯です。

なれなれしく
肩に回される手にも
慣れつつある。いや、
これは慣れとは違う——
心臓の高鳴りは、以前より
大きくなっている。

Patron Only (Extra +R18)

うう……
来てしまいました。
顧問殿との
二人つきりでの
特別合宿……。

ドキ♡

いや、分かってはいる。
生徒と顧問の
二人つきりの時点で、
これは合宿などとは
呼べないだろう。

それも、水泳部なのに
宿はプールもない温泉宿。
聞けば、売りは貸し切り
混浴温泉だとか——。
これでは、ただの
温泉旅行ではないか。

ドキ♡

生徒の合宿

いや、もつと
はつきりと言えよ。
生徒とまぐわう、
それだけのための旅。

ドキ

それはわかってる。
なのにどうして、
こうして私がついてきて
しまったのか……
風呂につかっているのか。
あまつさえ——

ゴク

ドキ

ピンと立った乳首を
隠そうとせず。
小さなタオルの奥で
股を濡らしているのか……
そう考えていると、
顧問殿が入ってきた。

キ

湯加減はどうだ、と言われましても。ええまあ——大変心地よい湯です。

ドゥ……♡

なれなれしく肩に回される手にも慣れつつある。いや、これは慣れとは違う——心臓の高鳴りは、以前より大きくなっている。

慣れではなく、期待、しつつあるのだ。この後の展開を。いつもの——「こすり遊び」を。

ぐっ

ドゥ……♡

ドゥ……♡

じゅど

はじめは、按摩の
たぐいだと言われた。
水泳で溜まったコリを
ほぐすものだ。

ドキ♡

受けてみれば、
それは存外心地よく、
もみほぐす手が
胸や股間にかすめても、
まあよいか、と流して
しまった。

きつとわざとでは
ないのだろう……と。
顧問殿を信用して
いたのだ。だが……。

ドキ♡



二度目の
「まっさあじ」では、
そうはいかなかった。

あゝ

私は無様なほどに
感じさせられ、
絶頂し、あまつさえ
失禁してしまった。

乳首を弄られ、股間を
弄られ、唇を奪われ……
いやというほど、
快樂とともに、「女」を
自覚させられた。

あゝ



こうして——
「こすり遊び」を
顧問に教え込まれ、
上下関係を体の芯まで
叩きこまれてしまった。

互いの性器を
こすり合わせる遊び
「こすり遊び」……
だがそんな遊びで
私は一度も顧問殿に
勝てなかった。

こうなるともはや、
従うほかない
ではないか……。
この靈基には、服従の
本性が刻まれている。



言われるままに、
足を広げ——
股間に手を
差し入れられても、
閉じることもせず。

好色な顧問に好き放題、
身体を弄られるが
ままにしている……。
顧問はニヤニヤと
更なる要求をしてくる。

え、足コキ、ですか。
ええ、まあ。
顧問殿がやれと言うなら
やりますが——。



視線の先には、
いきり立つ男の肉棒。
その棒が興奮に
固くなり、動く。

自分が足を動かすたび、
自分が甘くささやき声を
かけるたび、肉棒は
反応を返す。楽しい。

次第に、肉棒の反応を
見ながら、動きを変え
ようになっっていく——
媚びているのだ、自分は。

じゅわん
じゅわん

ふふ
ふふ

ぬちゃっ
ぬちゃっ

わん
わん

わん
わん



その夜、幾度となく
男に抱かれた。

斬るはたやすい。
首を落とすは
造作もない――。
そうお守りのように
心で唱える。

むろん、そんな素振り
見せたりしない。
ただ甘え、媚び、笑みを
浮かべ、快楽に流される。

ズッ

あ

ズッ

ト

あ

ズッ

ズッ

顧問殿は、私を
支配したと思っている。
若い娘を、性の快楽で
たらしこんだ。

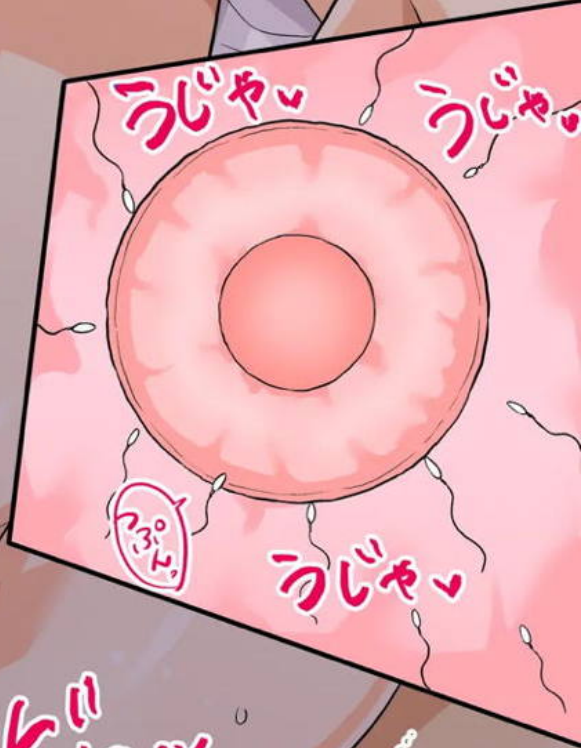
だが、妻子ある顧問殿は
気付いていない。
自分こそが私の身体に
溺れていることに。
もはや引き返せまい。

ああ、堕ちるとは。
ああ、破滅とは。
かくも心地の
よいものか――。



まぐわいが
はじまってから
数時間後――。

イクぞ



薄井
おお

びび

びび

サーヴァントでなくては
なしえない知覚だろう。
自分の卵子に、小さな小さな
精子たちがむらがついていく。
新たな生命となるために。

ひとときわ大きく、
顧問殿が射精する。
同時に……
自分の胎内――その奥に
たしかに受精を感じた。

ぽん

ぱん

ぱん

身籠るまで、
さほど時間は
かからなかった。

トクッ

トクッ

トクッ

トクッ



そんなに絶望した顔を
しないでください、
顧問殿。
ここにはあなたの
子がいるのですよ？

顧問殿のいちもつは、
もつと私と子作りしたいと
汁を垂らしておりますよ。
ええ、いくらでも
産んでさしあげますとも。

ああ、ああ。
これほど心地の良い
己は初めてです！
さあさ、もう一番、
始めましょうか。

ニッ
♡

ぬるっ
♡

ぬるっ
♡

完。



























いや、もっと
はつきりと言えよ。
生徒とまぐわう、
それだけのための旅。

ドキッ

それはわかってる。
なのにどうして、
こうして私はいてきて
しまったのか……
風呂につかっているのか。
あまつさえ——

ゴクッ

ドキッ

ピンと立った乳首を
隠そうとせず。
小さなタオルの奥で
股を濡らしているのか……
そう考えていると、
顧問殿が入ってきた。

キッ
……

湯加減はどうだ、と言われましても。ええまあ——大変心地よい湯です。

なれなれしく肩に回される手にも慣れつつある。いや、これは慣れとは違う——心臓の高鳴りは、以前より大きくなっている。

慣れではなく、期待、しつつあるのだ。この後の展開を。いつもの——「こすり遊び」を。



はじめは、按摩の
たぐいだと言われた。
水泳で溜まったコリを
ほぐすものだ。

受けてみれば、
それは存外心地よく、
もみほぐす手が
胸や股間にかすめても、
まあよいか、と流して
しまった。

きつとわざとでは
ないのだろう……と。
顧問殿を信用して
いたのだ。だが……。

ドキ♡

ドキ♡

ドキ♡



二度目の
「まっさあじ」では、
そうはいかなかった。

私は無様なほどに
感じさせられ、
絶頂し、あまつさえ
失禁してしまった。

乳首を弄られ、股間を
弄られ、唇を奪われ……
いやというほど、
快樂とともに、「女」を
自覚させられた。

あゝ

あゝ

あゝ



こうして——
「こすり遊び」を
顧問に教え込まれ、
上下関係を体の芯まで
叩きこまれてしまった。

互いの性器を
こすり合わせる遊び
「こすり遊び」……
だがそんな遊びで
私は一度も顧問殿に
勝てなかった。

こうなるともはや、
従うほかない
ではないか……。
この靈基には、服従の
本性が刻まれている。



言われるままに、
足を広げ—
股間に手を
差し入れられても、
閉じることもせず。

好色な顧問に好き放題、
身体を弄られるが
ままにしている……。
顧問はニヤニヤと
更なる要求をしてくる。

え、足コキ、ですか。
ええ、まあ。
顧問殿がやれと言うなら
やりますが—。



視線の先には、
いきり立つ男の肉棒。
その棒が興奮に
固くなり、動く。

自分が足を動かすたび、
自分が甘くささやき声を
かけるたび、肉棒は
反応を返す。楽しい。

次第に、肉棒の反応を
見ながら、動きを変え
ようになっていく——
媚びているのだ、自分は。

じゅわん
じゅわん

ぬちゃっ
ぬちゃっ

ぬちゃっ
ぬちゃっ

ふふ
ふふ

ゾク
ゾク

ゾク
ゾク

トッ
トッ



その夜、幾度となく
男に抱かれた。

ズッ

あっ

斬るはたやすい。
首を落とすは
造作もない――。
そうお守りのように
心で唱える。

むろん、そんな素振りには
見せたりしない。
ただ甘え、媚び、笑みを
浮かべ、快楽に流される。

トっ

あっ

ズッ

ズッ

顧問殿は、私を
支配したと思っている。
若い娘を、性の快楽で
たらしこんだ。

しっ
っ

だが、妻子ある顧問殿は
気付いていない。
自分こそが私の身体に
溺れていることに。
もはや引き返せまい。

ああ、堕ちるとは。
ああ、破滅とは。
かくも心地の
よいものか――。

しっ
っ

しっ
っ

はっ
っ

はっ
っ



身籠るまで、
さほど時間は
かからなかった。

トクッ

トクッ

トクッ

トクッ



そんなに絶望した顔を
しないでください、
顧問殿。
ここにはあなたの
子がいるのですよ？

顧問殿のいちもつは、
もつと私と子作りしたいと
汁を垂らしておりますよ。
ええ、いくらでも
産んでさしあげますとも。

ああ、ああ。
これほど心地の良い
己は初めてです！
さあさ、もう一番、
始めましょうか。

ニッ……
♡

ぬるっ
♡

ぬるっ
♡

完。























